

# 堀の記憶が成し遂げた、 柳川再生物語

## 『水の会』の18年の歩み

水郷で有名な福岡・柳川も、  
存続の危機を経験しています。  
多くの人の注目を集めた広松伝さんの活躍は、  
土地の風土と歴史を振り返り、  
掘割を市民の手に取り戻そうとしたこと  
から始まりました。  
水の会がその志を引き継いだ背景にある、  
人と仕組みと地場の資産を探ります。

柳川には、中心部のたった2km  
四方に60kmもの水路が、東西11km、  
南北12kmの柳川市全域ではおよそ  
930kmの水路が張り巡らされて  
いるという。

ところが1977年(昭和52)、  
幹線水路以外を埋め立て、下水溝  
にするという計画が浮上した。  
水路の汚染が進み、「汚い」「臭  
い」「蚊が大発生」という事態に  
まで環境が悪化。当時の古賀杉夫

柳川掘割の再生の軌跡を追う前  
に、そもそも掘割がどのようなも  
のなのか、少し探ってみよう。

### 水はけっして豊かでない

私たちは、柳川をつい「水が豊  
かな地域」と思いがちだが、実は  
真水を得にくい地理的条件がある。  
柳川は、筑後川が運んだ土砂で  
つくられた沖積平野。最大6mの  
干満の差がある有明海では、干潮  
時には大きな干潟が出現する。柳  
川に限らず、河口付近の平野の耕  
地化は、こうした干潟に掘割を切  
って排水を促し、掘り上げた土を  
盛ることによってつくられてきた。

よく「世界は神がつくった。し  
かし、オランダはオランダ人がつ  
くった」と言われるが、河口付近  
の低湿地を人力で耕地化するには、  
尋常でない努力が必要。また、井  
戸を掘っても真水が得られないか  
ら、干拓地は水源に乏しい。頼れ  
るのは雨水と川水である。

掘割は、土地の水はけのために  
つくられ、そこから掘り上げられ  
た土は耕地や住宅地や土居(堤防)  
に利用され、さらに真水を蓄える  
「溜池」機能も果たすのである。

掘割の水は、磯鳥堰(いとりせき)という防潮  
堤の上流で取水しているので潮が  
入っていない。干潮のときには排  
水されるようになっていく。

### ゆっくり流して

柳川では、上水道ができるまで  
は、飲料水も掘割から得ていた。  
一晩かけて澄切った朝一番の水を、  
大きな水瓶に汲み置いたという。

排水は、池に溜めて沈殿させて  
から流したり、水芋を植えて水を  
浄化させた。おむつを洗った汚水  
は庭に掘った「タンポ」と呼ぶ穴  
に流し、直接掘割に流すことはな  
かったそうだ。

今、水道水は筑後川などから取  
っている。また、新田開発が進ん  
で足りなくなった分の農業用水は、  
筑後川導水引いてきているという。  
柳川中心の2km四方、60kmの水  
路の水は、主に瀬高水門から入っ  
てくる。その水は、沖端川に設け



橋の下に見られるのが「もたせ」。掘割に何箇所もつくられたも  
たせが、水の増加にも対応する。

柳川市長は、これ以上の維持管理  
は不可能と判断した。  
「水郷柳川」を訪れた観光客から  
寄せられた手紙にも、「がっかり  
した」「汚くて驚いた」という文  
字が並んだ。その最悪の状況から、  
どんな再生の物語があったのか。



日吉神社の水辺デッキ。掘割に子供たちが遊ぶ姿が戻ってきた。(写真提供/水の会)  
右：有明海の珍しい魚介類が並ぶ、魚屋の店先。



漁師町である沖端の矢留大神宮。沖端の起源は、平家の落武者6人が馬に乗って住み着いたところからとされ、「ロッキ(六騎)の町」とも呼ばれる。掘割に面した階段は、襷(みそぎ)のために用いられるので、門の両袖には脱いだ着衣をおく場所が設けられている。

た二ツ川堰から人工水路の二ツ川に引き込んだ水と矢部川から取水している。しかし、頼りにすべき矢部川は総延長60kmの小河川で、実に1万6000haもの耕地をまかなわなくてはならない。

が、大切な水をいつそう長く滞留させ活用するために、柳川の人たちは、さらに「もたせ」という工夫を考え出した。「もたせ」を俯瞰して見ると、橋が架かっている場所などでは、掘割の幅が狭まっている。幅が狭くな

っているので、その手前で水はいつたん、滞留する。狭い所を流れるときは速くなるので、水を攪拌して酸素を取り込む作用もある。断面方向に見ると、上が開いた台形につくられている。このため、水が増えたときに貯留できる水量

が、少ないときよりも多くなるのだ。こうしておけば、満潮時に雨が降って排水できないときにも掘割に貯留することで氾濫を防ぐことができる。たとえ氾濫しても、じわじわあふれるだけで、潮が引くときに、掘割が排水路の役目を担ってくれるのである。

を、旧・城下町の城濠では特に水落しと呼んだ。単に掃除をするだけではなく、水を落とした掘割で、魚を捕ることも大きな楽しみだった。明治の末までは、城内にある日吉神社の秋季祭礼の前に行なっていた。捕った魚で酒宴を催すことが恒例だったからである。

## 水落し

ゆっくり流れると弊害もある。

滞留した水が激んで水草が繁茂したり、塵芥(じんがい)が溜まって水質が悪化したりするのである。

その解消方法として、城濠堰(しろぼりせき)を閉め切り沖端の二丁樋を開放し、掘割を空にして掃除をする。一般に掘干しといわれるこうした行事

つまり掘割には、少ない水を有効に利用する利水機能と、水勢や水量を調整して洪水を防ぐ治水機能が一体となった、非常に賢いシステムがあるのである。

柳川には、それまでも掘割はあったが、1601〜1609年(慶長6〜14)に城主を務めた田中吉政が近世柳川の基礎を築いたといわれている。

田中吉政 関ヶ原の合戦で東軍として戦った吉政は石田三成を捕縛するという戦功もあって、筑後の国主になった。郡上八幡や岡崎の水利もやった土木工学に長けた人物で、城の大規模修築、久留米、柳川往還の整備、慶長本土居の築堤など大きな功績を残している。

利用されなくなった水は汚れ、汚れた水には親しみが消えて、いつしか水路はゴミ捨て場となった。ビニールや缶など自然に戻らないゴミもどんどん水路に捨てられた。

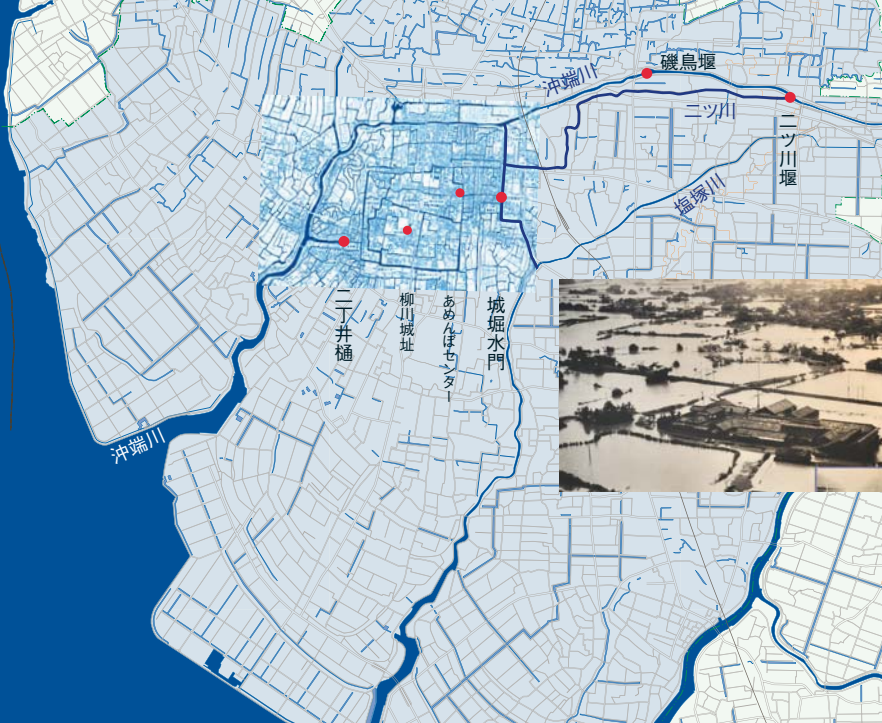
元・柳川市長の古賀杉夫さんは、汚れ切った悪臭を放ち、機能を果たすように見える掘割を、幹線水路以外は埋め立てて下水溝をつく

## ある市職員の挑戦

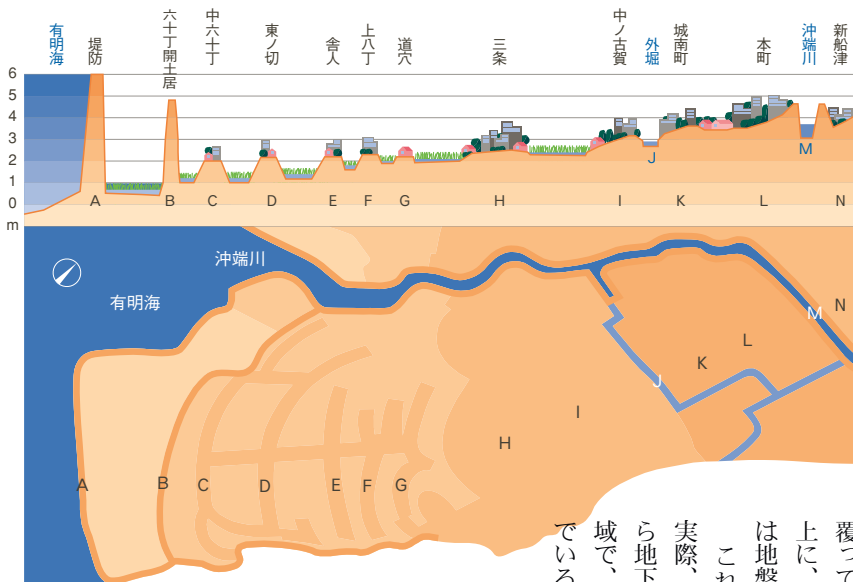
現在、有明海の高苔養殖への影響を配慮して、2月中旬ごろに10日間ほど行なわれている。

こんなにも豊かな水の仕組みを持つていた柳川も、高度経済成長期には他に間に漏れず、掘割存続の危機を迎えていた。

水道敷設によって飲み水として使わなくなったことが、水を大切にすることを失わせてしまった。加えて、合成洗剤の使用、油分の多い食生活への嗜好が、掘割の水の汚れに拍車をかけた。



モノクロ写真は、柳川に大きな被害をもたらした1953年(昭和28)水害のときの様子。地図や標高差を見ると、柳川が沖端川の河口部にできた干潟から、徐々に陸地になったことがよくわかる。国土地理院の基盤地図情報(縮尺レベル25000)「福岡」を元に作図 下図:柳川あめんぼセンター『水の資料館』展示パネルより作図



飲み水は上水道。だから、掘割はその機能を終えた。高度経済成長期に、多くの都市はそう判断して、掘割や川にフタをしたり埋めたりしてしまっただが、広松さんは柳川ならではの掘割機能を主張。それは、地盤の維持であり、洪水時の排水路としての機能である。「水路を埋めれば柳川は沈没してしまう」と言って、広松さんは住民に呼びかけをした。柳川は水分70%のガタと呼ばれる細かい粒子の土壌が、5〜18mも堆積した上に載っている。地盤を掘れば豆腐のような軟弱地盤なのだ。コンクリートやアスファルトで覆って水が浸透しなくなっている上に、地下水を汲み上げたら柳川は地盤沈下してしまう。

### 水の会、始まる

これは、単なる誇張ではない。実際、農業用水を溜池利用などから地下水汲み上げに切り換えた地域で、2mもの地盤沈下で苦しんでいる所があるという。

- 1 浚渫によって水路を復元し、流水を確保する。
- 2 排水規制を強め、浄化施設を増やし汚水の流入を抑える。

ることで、市民の環境改善を図るしかない」と判断した。

ところが、国から6割の援助を取りつけて、20億円に上る工事計画が決まった矢先に、都市下水路係長だった広松伝さんが「待った」をかけたのである。

広松さんは、以前の担当が上水の仕事だったことから、川と土地との関係を熱心に調べて理解しようとして努めてきた人だ。広松さんの熱心な説得に、古賀市長が出した条件は、6カ月の猶予を与えるか

ら、実現性の高い代替案を作成せよ、というものだった。

いったん決まった計画の見直しに難くない。今でこそ、ダム計画の白紙撤回といった画期的な計画見直しが実現しているが、1970年代後半(昭和50年代)には考えられない英断だったといえよう。それには、古賀市長の「昔に返せるものなら、それに越したことはない」という思いが込められていたのである。

### 水に浮かぶ柳川

あちこちの現地に足を運び、データを集める以外にも、住民を説いて同意を得るという役目を一人で負った広松さん。人を説得するために勉強を始め、このことが掘割を歴史の側面、科学の側面から総合的に検証する、初めての研究となった。

長期に、多くの都市はそう判断して、掘割や川にフタをしたり埋めたりしてしまっただが、広松さんは柳川ならではの掘割機能を主張。それは、地盤の維持であり、洪水時の排水路としての機能である。「水路を埋めれば柳川は沈没してしまう」と言って、広松さんは住民に呼びかけをした。柳川は水分70%のガタと呼ばれる細かい粒子の土壌が、5〜18mも堆積した上に載っている。地盤を掘れば豆腐のような軟弱地盤なのだ。コンクリートやアスファルトで覆って水が浸透しなくなっている上に、地下水を汲み上げたら柳川は地盤沈下してしまう。

3 維持管理体制をつくり、市民参加の清掃を復活する。

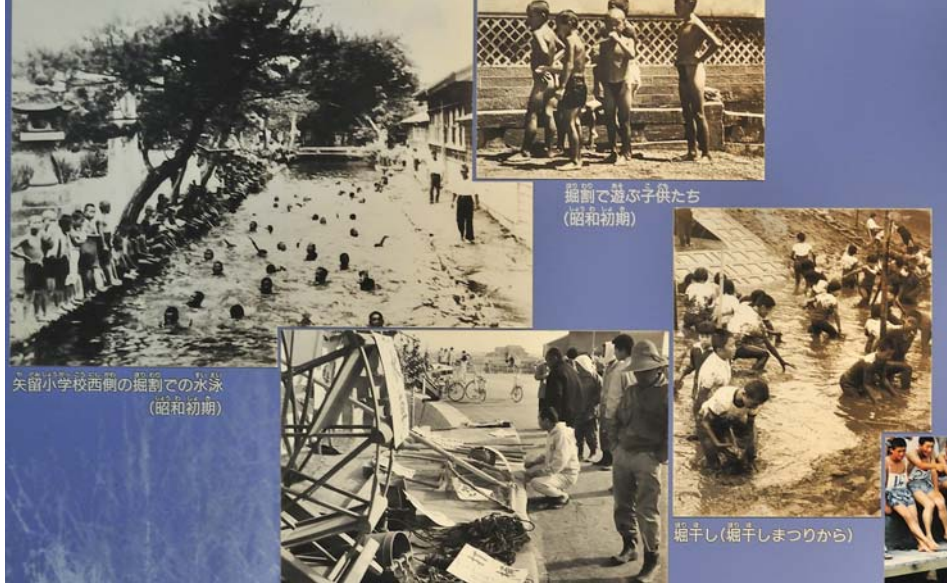
広松さんをはじめ、市職員が率先して清掃を行なう姿に、美しかった掘割の記憶を持つ人たちが共感した。

当時広松さんは、水路が1本きりになって流れが戻ったら活動が加速した、と語っている。水路上につくられた不法構築物を自主的に撤去したり、最初は頭を悩ませたヘドロの捨て場を提供してくれる人も現れる。結果的に2倍のスピードで目標が達せられ、費用は下水路計画の5分の1で済んだ。1989年(平成元)、第5回全国水郷水都全国会議が柳川市で開催される。この成果を受けて、「水の会」発足に向けた活動が始まった。2年後の1991年(平成3)、水の日である8月1日に「水の会」が発足。

柳川に水を供給する沖端川の上流に、矢部川源流の山村、矢部村がある。この村の子供たちとの交流も始まる。

### 掘割はクリークではない

掘割は、川でもあり池でもある。英語のクリーク(Creek)とは違う、と水の会の立花民雄会長(柳川城主立花氏の子孫。柳川市観光協会会長)



掘割で遊ぶ子供たち  
(昭和初期)

矢留小学校西側の掘割での水泳  
(昭和初期)

堀干し(堀干しまつりから)

はいつも言っているようだ。クリークは、米語では小川、英語では小さな入り江のことを指すから、自然にできた潮が上がつってくる水路をいうのだそうだ。だから、ここでいうと沖端川や塩塚川は、クリークである。

掘割は自然な地形を利用して、人工的な手が入っているから、正確にはキャナル (canal)。

立花会長の記憶によれば、最初に言い出したのは北原白秋(柳川出

上：昭和の初期には、掘割と暮らしは密接にかかわっていた。  
(あめんぼセンター所蔵パネル。42pも)

下：かわかりが薄くなって、ゴミ捨て場と化した掘割。広松さんと市職員の熱意に、住民たちも引き込まれていった。話し合いの席の右端にいるのが、広松さん。下段左は、「堀と人をつなぐ日」で行なった堀掃除。(写真提供：水の会)



身の文学者)ではないかということ。今ではその誤用がすっかり定着してしまった。

掘割との新しいつき合い方

毎年恒例となった、潮干狩りの日の午前中、水の会幹事の堤弘崇さんと平野幸二さんが、インタビューに答えてくださった。

どの家も掘割に面しているので、水汲み場があり、「水くん場」と

呼ばれて親しまれてきた。今年50歳になる平野さんは、「飲んだ経験があるのは、爺ちゃん婆ちゃん世代。僕は飲んではいないけれど、茶碗を堀で洗った経験がある」

掘割の水が急速に汚くなったのは、上水道が敷設されてから。小学校にプールができたことも、それを加速した。

実は、水が汚れていた時代にも市が予算を取って管理していたの

だが、いったんはきれいになって、すぐにまた汚れてしまう。

昔は、さらった泥は農地の大事な客土だったし、掘割は舟運にも活用されていた。観光の川下りだけでなく、交通手段として機能していた。住人が掘割とそんな深いつきあいをしていない今、維持していくのは容易ではない。

下水道が敷設された現在も、掘割の水が汚れているのはなぜか。それは、下水幹線からの引き込み部分が個人負担で、利用していない人も多いからだ。当然のことながら、罰則規定はない。

「昔のように利用していないので、きれいにするといいっても限界がある。結局、掘割と向き合うためには、良いことばかりじゃない。煩わしさもあるんです」

新しい掘割との付き合い方にとんなものがあるのかは、まだきちんと位置づけられていない。

水の会では「とにかく掘割で遊ぼう」「まずは掘割を楽しもう」と、8月初旬に「水郷柳川の水の祭典実行委員会」が行なっている「スイー!水!すい!」に協力している。

ことから始めているのだ。少ない水を使い回す

下水問題も難しい要因を含んでいるが、要は水量が足りないことが一番の原因である。水量が充分にあつて流れがそれなりにあれば、きれいになるからである。

水の会と連携を取っている、NPO法人有明海理事長の工藤徹さんは、川下りの舟会社の経営者でもある。工藤さんは

「堀の管理は(取水口も排水口も)農業委員さんの役目。他の人間は触ることが許されません。近年つくられた農業用水路はコンクリート三面張りで見つ直ぐ。水がすぐに流れ去ってしまう。掘割が(もたせ)でゆっくり流したのとは正反対です。ですから、水がすぐに足りなくなつて、柳川の下流の耕地に流すために掘割の水位が低くなつてしまふんです」

と言う。川舟は掘割に水がなければ営業できない。観光で頑張っている柳川にとって、これは手痛い打撃となる。

工藤さんは、田中吉政没後40年に当たる今年、掘割の持つ意味を問い直そうと働きかけている。平野さんも水が循環しているものだという思いを取り戻したい、と言う。



市立図書館に併設されたあめんぼセンターには、柳川の掘割の歴史を説明した展示が行なわれている。あめんぼセンター北側の掘割は、水の会が掘り掃除とともに黄色い菖蒲を植えているそうだ。  
 下右から：「水の会」の幹事の堤弘崇さん、平野幸二さん。在りし日の松石めい子さん。（写真提供：水の会）



街の駐車場になつていける殺風景な場所が、実は城の玄関口。辻門があつた所である。城内に入るときは、ここで審査を受けて入るから時間がかかる。そのため、この辺りに御客屋ができて、大層繁盛していたそうだ。

「今は何にもありません。辻門の堀を開けようという運動もありますが、開けるのはできても、どう活用するかまで考えなくては続きませんから」と平野さん。

「観光客は柳川駅のそばで舟に乗ったら、そのまま御花（おはな）（柳河藩三代藩主立花鏡虎が城の西南に築いた休息用の屋敷）まで行つて、川下りとウナギだけで終わってしまったっているんですよ。観光客は、年間約120万人、しかし宿泊するのは全体の約5%に留まっています。」

柳川は、掘割が残つたから江戸時代の古い町並みも残つた。古地図と現在とで、あんまり変わっていないんですよ。道も狭いし、見通しも悪い。それは、城攻めがしにくいようにつくられていたから昔は堀も幅が25mぐらいあつた場所もあります。弓で射つても届かない距離だということです。

大きなお寺さんが多いのは、兵隊を隠しておくためだったんです。城の増築がなかなかできなくなつた時代に、お寺はつくるのが許された。だから路地裏を歩いてもらえれば、柳川の歴史をもっと身近に感じてもらえるんです」と堤さんは、柳川の歴史を知つて隠れた魅力を再発見してほしいと言つた。

「福岡市の隣の糸島で勤務してました。そのときに低農薬農業とか環境問題に取り組まれていた宇根さんという方が、広松さんを糸島に呼ばれたんですよ。1993年（平成5）ぐらいだったでしょう。私も柳川出身。講演を聞いて改めて考えさせられました。」

堤さんが水の会に入つたのは、広松さんが亡くなつてからだった。「学生時代に東京に住んでいて、全国水環境交流会の事務局を手伝つていたんです。そのご縁で、広松さんの懇話会をやる、というお知らせがきた。地元に戻つてきていたので、友人に誘われて参加しました。そのときに隣に座つたのが、のちに事務局長になる松石めい子さん。カップに引き込まれるみたいに、引つ張り込まれた」と平野さんは古参のメンバーだ。

2002年（平成14）、広松さんは64歳で急逝してしまう。牽引役を失つた水の会は、ここから第二のスタートを切つた。

「我々は蛇口を捻ればきれいな水道水が出るのを、当たり前と思つています。そして、すべてお金を換算してしまう。お金という代償に置き換えてしまつて、どこからどのようにしてきた水か、どこへ行く水かという本質を見ないようになつていく。それは水が蛇口の中や、配水管の中に閉じ込められ

ているからですね。今みたいに、塩ビ管からドゥッと流すんじゃないかと、昔は、使つた水も使つた水も目に見えた。水波みか朝一番の仕事だったし、使つた水も、そのまま流さないうで浄化するシステムがあつたんです。そういう水の循環というのができていたんですね。今思うと、最先端

のサイエンスですよ。柳川の場合、水量が少ないから一巡した水を、また戻して使つていく。汚れた水だけれど、それは自分たちが使つた結果ですから」掘割と暮らしを結びつける

掘割の上に道路ができて、商店

広松さんからのバトンを



上：柳がそよく、広い堀幅の幹線水路。  
左：今は稀少価値になった「水くん場」。  
下：5月の沖端水天宮の祭につくられる、舟舞台の模型。6艘の船をつなぎ、松葉で化粧を施される。6艘は六騎から。舞台での出し物は、現在子供たちによって演じられている。



下：課題は、まだある。駐車場や暗渠となつてしまった堀割の復活だ。自動車中心の暮らしが堀を道路や駐車場にしてしまった。左下は、かつての辻門につくられた商店街の駐車場。



転動で柳川に帰ってきてからは、広松さんたちと一緒に活動するようになりました。浄化槽の普及を進めたり、一時は「ゴミの会」みたいに、ゴミの勉強会もしました。最初はスーパースター広松さんが、全国で講演をされて。堀割の再生が、非常に大きな功績としていろいろな所に取り上げられていった、という形でした。

「柳川で柳川に帰ってきてから、いした。やはり、我々は広松さんの意思を受け継いでいこう、ということになりました」

そのときは、名簿自体がなかったから会員数も定かではなかった。水の会の再スタートは、名簿をつくり直すところから始まった。

しかし、事務局長を引き受けてくれた松石さんも2006年(平成18)に亡くなられてしまう。広松さんが亡くなって、松石さんが活躍されたのはわずか4年ほど。でも、会として機能するように仕組みをつくってくれたのは、松石さんだった。

とにかくあつちこつちの交流会や勉強会に参加し、他団体や研究者などと交流したりネットワークづくりに、松石さんの行動力が発揮された。堤さんは言う。

「島谷幸宏先生を活動に引き込んで、全国各地再生まちづくり会議の関連行事、日仏景観会議、水もり自慢大会などを柳川で開催して、内外にアピールしたりと、松石さんの功績は大きいです」

今は会員全体で50人ぐらい。5月第4土曜日を「堀と人をつなぐ日」と決めて、町内会の掘掃除を手伝っている。堀さらいまではしないが、護岸の草刈り、黄菖蒲の植栽と、美観に役買っている。

「堀掃除も5回目になりました。ただ掃除するだけではなく、終わってから交流会をやったんです。そこで初めて、掘割をこれからどうするか、辻門の暗渠を開けたらどうか、といった話をしました。もつと無関心かなあ、と思っていたんですが、『こういうことは大事なことから、これから協力したい』と言ってくれただけです」

と平野さん。

最近取り組み始めた水の浄化も、水の会だけでやったら広がりが無い。やはり、もつと多くの人と一緒にやりたい。そして次のステップとして、いろいろな地域の人とやるようにしたい。そこには、行政も巻き込んで。

「住む人と掘割との、今の時代に合った新しい関係をみつけて掘割を活用しないと、だんだんマンネリ化してきて、せつかくきれいななくなったのにまた元に戻ってしまう。多くの人と一緒にやるのは、結構大変で、自分たちだけでしたほうが、よっぽど簡単だけれど、その原点にあるのが広松さんなんです。広松さんは2年間で百数十回も地元の人と根気よく話し合ってきた。あれをやらないと、かつて行政任せにしていたときのように、掃除をしてもすぐに汚れてしまうでしょう」

柳川では『ゆつくり』のことを、『ジワッと』と言う。水も自然も、すぐに思い通りにはならないもの。だから水の会は、せつかちにならずにジワッとやっていたら、と考えている。

「まちづくり」には「未来予想図」のような夢があつて、その中心に掘割がある。観光も「まちづくり」として大切なもの。しかし、それだけでは地元の住民がかかわれる部分が少なすぎる気がする。掘割とのつきあいが、もつと暮らしに密接にかかわるものになったら、水への関心が増えるのではないか。

かつて広松さんの熱意に賛同した人々には、掘割の楽しい思い出があつた。今は、先に立ってしまったら、先に乗ってしまっている煩わしさを乗り越えなくてはならない。

人と掘割との関係を、きちっと築いていくことが、水の会の目指すところである。

